【小学生の部最優秀賞】

自分を変える

三重旺武道場
鈴鹿市立石薬師小学校　六年
市川　知樹（いちかわ　ともき）

「剣道を辞めたい・・・」五年生の三月、今まで言えなかった言葉をついに母に言うことができた。母はずっと僕の気持ちに気づいていたと思う、僕の口からその言葉を聞いた途端、母は泣いてしまった。

僕は幼稚園の年中の時、兄が通っていた道場に入団した。たくさん友達もできて、みんなで竹刀を振って、道場に行くのが楽しみだった。剣道を始めて一年たったころ、新型コロナウイルスが出てくると、だんだん道場の稽古もできなくなっていった。最初のころは、母は稽古ができると聞くと僕たちを連れていってくれた。父や祖父母は剣道に行くことに反対していて、「なんで応援してくれないんだろう」と思っていたが、あとから祖父が手術をしたあとで、感染を心配していたからだと聞いた。制限が厳しくなったことや、父母が福祉関係の仕事をしている関係で、段々と稽古どころか外出も難しくなっていった。

道場もお休みになってしまい、何もかもができなくなった。それでも自主練をすればよかったのだと思うが、僕は道場に行きたいと思っても行けなかった空いた時間にゲームをするようになっていた。頑張ろうという気持ちが切れ、なまけたい気持ちに負け、コロナのせいにして何もせずにすごしてしまったのだ。

みんなが少しずつ行けるようになったころも父母の仕事の制限で道場に行けない日が多かった。制限がなくなり、道場にしっかり通えるようになったのは五年生になるころで、自分以外の全員が強くなっていて、みんなに置いていかれた気がして、自分が情けなくて、よけいに行きたくなくなり、仮病でさぼることも多くなっていった。稽古に行っても、みんなよりできない自分をごまかすように、稽古中にふざけたり、しゃべったり、真面目にやらなかった、先生にもよく怒られた。僕は心の中では「何で怒られなきゃいけないんだ、やめたい、帰りたい」とずっと思っていた。母はいつもそんな僕を怒っていたけど、悲しそうだったのは僕も感じていた。でもどうしてもみんなに追いつけない自分がいやで、行きたくなかったのだ。六年生になる前にやっと「辞めたい」と伝えた時、母が泣いていたのは、僕がみんなと差ができたことに悩んでいたこと、そしてコロナの時に仕事の関係上、僕を稽古に連れていけなかったことをずっと母も悩んでいたからだった。僕の心の中を母は知っていたんだ。それでも母は、「もう少し、小学校の間は続けられないかな」と泣きながら僕に言った。母の悲しそうな顔は、自分のせいだと思っていたからかもしれない、そう思うとこのまま辞めてはいけないと思った。「じゃあ、あと一年」と約束をした。

あと一年、と思うと心が軽くなり、それならみんなとの差を少しでも縮めよう、と思うようになった。技の練習もふざけるのをやめ、自分の欠点を直すように心がけた。すると、いつもは一回戦で負けていたのに勝てるようになってきた。

「練習すれば、できたんだ・・・」みんなに追いつけず、嫌いになった剣道が少し好きになれた。コロナが終わっても、いつまでも剣道に行きたがらない僕をあまり応えんしてくれなかった母以外の家族も、僕が楽しくなったならがんばれと言ってくれるようになった。僕の剣道への姿勢、向き合い方が見抜かれていたんだと思った。あの時、自分に甘えず一人でも練習していればよかった、そうすれば今の自分はもっと強かったかもしれない、今でも心残りだが、自分が変われば周りも変わるんだと思った。今も自分に甘えがでることはあるが、努力する難しさを学べたことは自分にとって未来をかえることができると思っている。未来の自分は、きっともっと剣道が楽しくなっている。こんなに休んでいた僕を迎え入れてくれた仲間や先生、だめな時の僕にも、いつも味方でいてくれた母、全員に感謝して剣道をこれからも続けていこうと思う。「僕は剣道が好きだ。」あきらめていた自分から、もう一度がんばれたこと、剣道を通して、少し成長した自分を誇らしく思う。